

『計量国語学』アーカイブ

|               |                                                                |
|---------------|----------------------------------------------------------------|
| <b>ID</b>     | <b>KK280501</b>                                                |
| <b>種別</b>     | 調査報告                                                           |
| <b>タイトル</b>   | 台湾文学作品に見る日本語借用現象の量的推移                                          |
| <b>Title</b>  | Variation of the Phenomenon of Japanese Loanwords in Taiwanese |
| <b>著者</b>     | 黄 意雯                                                           |
| <b>Author</b> | HUANG Yi Wen                                                   |
| <b>掲載号</b>    | 28巻5号                                                          |
| <b>発行日</b>    | 2012年6月29日                                                     |
| <b>開始ページ</b>  | 167                                                            |
| <b>終了ページ</b>  | 185（英文要旨:p.207）                                                |
| <b>著作権者</b>   | 計量国語学会                                                         |

## 台湾文学作品に見る日本語借用現象の量的推移

黄 意雯 (文藻外語学院)

**キーワード**：日本語借用現象，平均出現度数，出現率，高頻度語彙，広範囲語彙

### 1. はじめに

本研究は台湾文学作品を通して、「日本統治以降の台湾の中国語における，日本語との接触によって生じた日本語からの借用現象」について縦断的に観察することを，主たる目的としている．従来，台湾における中国語文献を対象とした同一もしくは近隣分野での先行研究は，戦後の資料による共時的な語彙調査（鍾季儒（2005），杜岱玲（2009），施恒雅（2009）など）が多くを占めており，これに対し，大規模な通時的調査はほとんど行われてこなかった，と言ってよい．

拙稿（2009），（2010），（2011）では，それぞれ日本統治期，跨世代，戦後第二世代の作家による文学作品を対象として，そこに出現する日本語からの借用現象について，共時的な観察を行った．小説は新聞など他の文献にもまして，さまざまな文体や表現に富んでおり，その時代ごとの言語資料の宝庫であると言える．とりわけ会話に代表される口語表現に関しては，新聞や雑誌の通常の文章に幾倍してその変遷を伝えている，と言えよう．このように小説を主たる調査対象とすることによって，台湾文学作品における日本語借用現象に対し，各時期の借用の特徴や要因のみならず，借用の歴史的な変化についても複眼的な考察ができる．また，1980年代以後の「新外来語」については，先行研究こそ多いものの，まだ体系的に編まれた文学全集が出現しておらず，今回は対象に入れないこととする．ここではこれまでの研究成果を踏まえつつ，通時的，かつ計量的な観点によって，日本語の借用にどのような数量的な変遷が見られるか，を明らかにしたい．

### 2. 調査

#### 2. 1 調査テキスト

本研究で取り上げる具体的な調査対象は，日本統治期から戦後の1990年代にかけて，前後統治期，跨世代，戦後第二世代，そして戦後第三世代の計四つの時期の作家によって書かれた中国語による小説である．

表 1：各時代に用いた調査のテキスト

| 時 期    | テ キ ス ト                  |                |
|--------|--------------------------|----------------|
| 日本統治期  | 『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集』緑蔭書房 | 別巻(諸家合集＝中国語作品) |
| 跨 世 代  | 『台湾作家全集』前衛出版             | 日拠時代と戦後第一世代の部  |
| 戦後第二世代 |                          | 戦後第二世代の部       |
| 戦後第三世代 |                          | 戦後第三世代の部       |

戦前の日本統治期については、1999 年に東京の緑蔭書房から出版された『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集』をテキストとして用いた。これは日本統治時代の台湾人作家を網羅すべく編まれた本格的な作家選集である。この作品集は、本文全五巻のほか、別巻一冊がある。本文の第一巻から第五巻では日本語作品、そして、別巻では中国語作品が収められている。各巻には各作家の作品を収録するほか、「作品初出一覧」「作品解説」「著作年譜」「略歴」「研究文献目録」も付せられており、極めて周到な編集方針が貫かれている。また、研究資料としても使用できるように、可能な限り初出時の形態で複製されている。したがって、日本統治期の台湾文学を研究するうえで、非常に貴重な文献となっている。

他方、戦後については、1994 年、台北の前衛出版社から刊行された『台湾作家全集』を調査のテキストとして用いた。これは台湾最初の本格的な台湾文学作家選集で、戦前は「日拠時代」として一括し、戦後に関しては、「世代」という区切り方によって第一世代、第二世代、そして第三世代の計四部に分かっている。そのうえで、1920 年代から 1990 年代にかけての重要な作家五十七人による短編小説を、計五十冊に集成している。ここで戦後の時期の区切りについては、上記『作家全集』における分類を踏まえつつ、次のように定義してみたい。

まず、「跨世代作家」とは、日本統治期に日本語教育を受けた結果、創作言語に日本語を選択したものの、やがて敗戦とそれに伴う中華民国への復帰という歴史的な激変をへて、中国語作家として台湾文壇に再登場した人々、の意である<sup>1</sup>。したがって、本研究で取り上げたのは、日拠時代（日本統治期）および戦後第一世代の中で日本語と中国語との二言語で創作した作家たちである。なお、上記『作家全集』における日本統治期と戦後第一世代の作家両者の区切りは、前者が主に統治期に活躍した人々であるのに対し、後者は戦後初期に活躍していたという点にある。

次に、「戦後第二世代」の作家とは、1950 年代後期から 1960 年代前期にかけて文壇で活躍した一群の作家たちを指している。彼らの出生年代はすべて 1932 年以後であり、戦後の国民政府下での中国語教育を受けたために、中国語による創作能力を具備しており、この点、それ以前の世代とは著しく対照的に「日本語に慣れ過ぎたことからくる中国語への適応上の困難性」とは無縁であった。

<sup>1</sup> 余昭玟(2002：1)によると、台湾の詩人林亨泰(1924～)は、自己の属する世代を中国語で「跨越語言的一代」と表現している。日本語に意識すれば、「言葉の壁を超えた最初の世代」と訳されようか。「跨世代作家」の語義は、これとほぼ同義である。

最後の「戦後第三世代」の作家とは、1960年代後期から1970年代中期にかけてデビューした作家たちを指している。この世代の作家は、1940年以降に生まれたため、学校教育ではもはや日本語と絶縁した、しかも公教育自体がかなり反日的に塗り込められた環境に浸っている。また、戦後第二世代に見るような本省人や外省人の区別もだんだん希薄になり、人によっては閩南語や客家語などの方言を母語としていたにせよ、書くと読むの両面においては、中国語が最も操りやすい言葉となっただろう。

朱双一（2002）は『戦後台湾新世代文学論』において、「世代」という観点から文学研究上の新たな視点を打ち出した。すなわち彼は、次のとおり指摘している——『「世代（generation）」とは、一群の作家の出生年がある特定の時期に集中しているか、もしくは、ある特定の時期に多くの作家が輩出されたか、によって構成される。これは特定の創作手法による共同的な実践者や、これも特定の文学思潮・運動の創始者を指す『流派』とは異なる範疇である』と、筆者もまたこの見解に同調し、そのうえで、これを本研究に応用すべく、次のように考えている——台湾現代文学の発展において、単純に現代派や郷土派といった「流派」の視点からは、文学発展に見る複雑性と豊富性についてそのすべてを説明することはできないし、各段階における文学発展の状況と「流派」の動きとが必ずしも合致しているわけではない。それゆえ、「世代」という視座は、台湾文学作品における日本語からの借用現象を考察するうえで、いかにも適切なものとするべきではないだろうか。

このようにして、本稿では作家の生年や作品の発表年ではなく、「世代」という概念を用いて、時期を区切って調査していくわけである。上記『作家全集』での「世代」についての区切りは、ある作家が活躍している時期によって定まるがゆえに、本調査における各時期の作家の生年や作品の発表年は多少の重複を避けがたいものとなっている。<sup>2</sup>

## 2. 2 日本語借用現象とは何か

異文化間の接触によって発生した両言語間の語彙の交流は、いかなる時代および地域であれ、およそ必然的なものであろう。一般に、外国起源の言葉が語形・意味・発音・表記といった何らかの組み込みをなし、自国の国語体系へと帰化した現象を「言語の借用」という。これを日本語では「外来語」や「借用語」と称する。中国語ではしかし、「外来語」や「外来詞」に始まって、「借入語」、「借用語」、「借字」、「借詞」、「借語」に至る<sup>3</sup>まで、五指に余る用語が認められる。日本語での用語にせよ、中国語でのそれにせよ、本研究では基本的には同義異名として扱い、敢えて区別しなかった。

さて、外来の言語による自国語への流入には大別して（1）借音、（2）借義、そして（3）借形という三つのメソッドがある。日本語由来の漢字語は借形と借義が重なるため、これを漢字文化圏における特殊的な現象だととらえ、「外来語」として認めない、という学説ももとより存在する。また、本調査において抽出した日本語からの借用語彙は、作者個々人の生活背景を色濃く反映したものであるという可能性が高い。その語彙を作者が「外来語」と見ていたか、それとも既に純然たる母国語の語彙と見なしていたかは、なかなか判別が難しい。そこで筆者はあえて「日本語借用語」ではなく、「日本語借用現象」

<sup>2</sup> 実は、今度調査した戦後第二世代による作品では、黄娟の「命運的鞭子」と陳恆嘉の「事件」、「癡情」、「要飯的」、「曳得長長的影子」、「暴徒」の計6作品は、戦後第三世代の発表年（1968-1991）よりもさらに2年後の1993年にまで及んでいる。

<sup>3</sup> 史有為（2000）『漢語外来詞』P. 8-10を参照。

と称したいのである。

そのうえで、この概念へ年代面での限定を加え、「日本統治以降に台湾に借用された語」に限定したい。したがって、近世以降、日本が西洋文明を受け入れるために作り出したいわゆる「新漢語」<sup>4</sup>については——例えば「電話」、「阿片」、「神経」のような現代中国語にも使用されている言葉は——基本的に日本語借用現象とは認めない。また、「公学校」、「保正」、「内地人」など、当時の制度、教育、社会にかかわる固有名詞は、特定の限られた時代にのみ用いられたものでもあり、現代の日本本土における生活にはもはや用いられていないので、日本語借用現象としては扱わない。

### 2. 3 調査の流れ

本調査は全文調査である。借用の原語たる日本語にあつては、近世、近代の新語や訳語があり、かつ、中国語においては日本製の漢語が、中国固有語に同じく漢字を用いているがゆえに、文字表記による弁別もできなければ、音声特徴による語源探求も不可能である。したがって、借用現象であるか否かの弁別は、その実多くの難点を抱えている。今回は以下の手順によって、日本語から借用した用語を極力はっきりと弁別した。

一、現代中国語において不自然、ごろが悪い、もしくは意味不明と見られる語彙については、それがネット上の日本語辞書たる「goo 国語辞書」<sup>5</sup>に記載されているかどうかを検索する。検索した用語が確実に日本語に存在している語彙だと判明しなかった場合には、ただちに排除する。

二、日中同形同義語か否かを確認すべく、上項で検索した語彙をネット上の辞書たる「重編国語辞典修訂本」<sup>6</sup>、および紙本の定評ある両辞典『漢語大詞典』<sup>7</sup>と『中文大辞典』<sup>8</sup>とによって再確認する。この段階で主にその語の出自が中国語であるかどうか、また、その日本語の意味が中国語と一致しているかどうか、という二つの事項を判定する。この営為によって、「日本語から借用」におけるプロトタイプと非プロト

<sup>4</sup> これらの新漢語はその出自によって、「日本語和製漢語」、「日本語和製訳語」、「中国古典からの再輸入語」、そして「中国古典からの日本語和製訳語」の計四種類に分けられる。

<sup>5</sup> <http://dictionary.goo.ne.jp/>. 辞書専門出版社として定評ある三省堂提供の『大辞林 第二版』と『デイリー新語辞典+α』とに収録された約 25 万の語彙の中から、新語、四字熟語、ことわざ、慣用句、古語などを調べることができる。とりわけ、世の中の変化に即して変化したり、また、新たに生まれた言葉やその表現方法については、「新語」としてデータを登録し更新している点が評価できよう。

<sup>6</sup> 台湾政府教育部（日本の文部科学省に相当）によって編集されたネット辞典。<http://dict.revised.moe.edu.tw/>. 中古から現代までの語彙を網羅し、歴史言語学の研究には適切な辞書だと考えられている。用例掲載が殊に懇切であり、従来の紙本形式の辞書に比しても何ら遜色を認めない。

<sup>7</sup> 羅竹風編(1997)『漢語大詞典』（台湾版）東華書局。中国大陆で編纂・刊行された同名の辞典の台湾版であり、中国と台湾とで戦後半世紀を経る間に意味上の相違を来した語彙を、とりわけその中国大陆における意味を知るうえで便利である。

<sup>8</sup> 中文大辞典編纂委員会編(1985)『中文大辞典』（第七版）中国文化大学出版社。1990 年代以降の新語は年代的に掲載し得ないものの、本研究で取り上げる文学作品はほぼカバーしており、かつ、その編集集団（当時の国民政府に極めて近い学者ら）の性格からして、政府教育部編纂の国語辞典に準ずる精緻なものとして差し支えなからう。

タイプが抽出されよう。また、日本統治以前の台湾の中国語における、日本語との接触によって生じた言葉もこの作業で排除されうるものと考えられる。

以上の判断基準と用例抽出の流れは、下の図1のように示すことができよう。3. 以下の語数についての計算は、このプロトタイプと非プロトタイプの合計を指している。

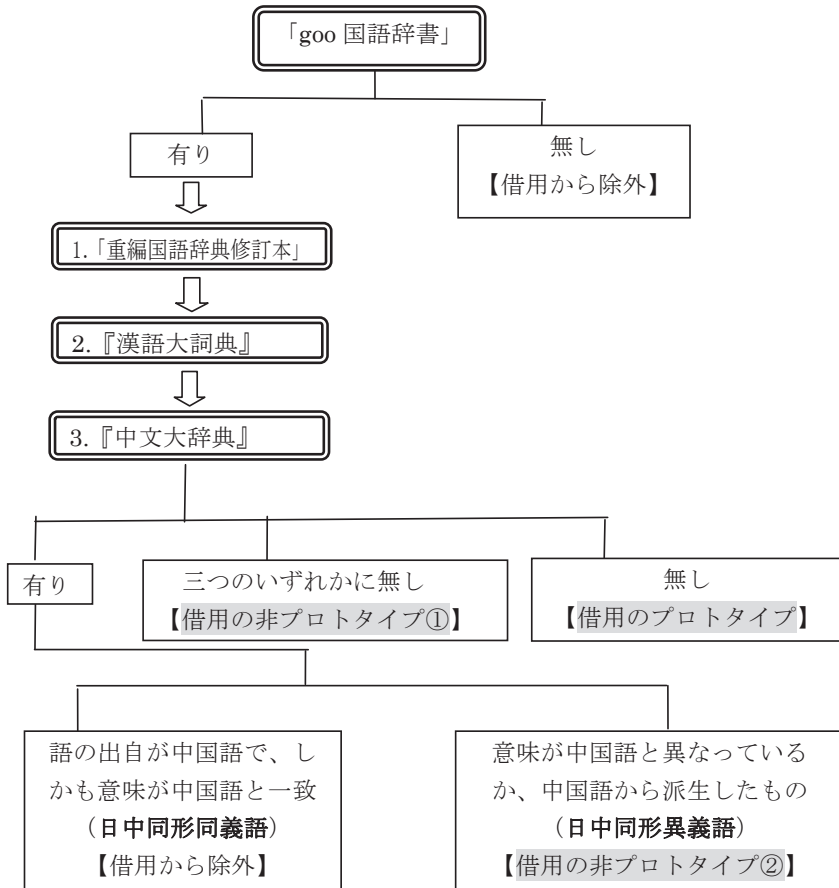


図1：判断基準と用例抽出の流れ

### 3. 各時期についての調査結果—平均出現度数と出現率

1926 年から 1993 年にかけての四つの時期について、以下のとおり扱った。作家は計 55 人、作品の総数は 472 篇である。そして、得られた日本語借用現象は、異なり語数 551、延べ語数 1,674 を数える。各時期の作家・作品に関する情報や、異なり語数、延べ語数、平均出現度数、異なり延べ比、出現率を表 2 に示す。集計数値の処理方法については、影浦(2001)、山田(2005)、橋本(2010)などを参照しながら作成したのだが、そこに使われている数値の意味と計算方法は、次の通りである。

|        |                                                                  |
|--------|------------------------------------------------------------------|
| 総文字数   | 作品に使用されている文字数で、示されている数は概数。使用テキストのページ当たりの文字数の平均値に総ページ数を乗じて算出している。 |
| 延べ語数   | 作品中に現れる日本語借用の総数で繰り返しを含む。                                         |
| 異なり語数  | 作品に現れる日本語借用における異なり語の数。                                           |
| 平均出現度数 | 「延べ語数÷異なり語数」。                                                    |
| 異なり延べ比 | 「異なり語数÷延べ語数」。                                                    |
| 出現率    | 「日本語借用の延べ語数÷小説の文字数×10000」。                                       |

表における平均出現度数、異なり延べ比と出現率の欄の数値は、すべて小数点の下三桁目を四捨五入して得られたものである。

表 2：各時期についての調査結果

|        | 日本<br>統治期 | 跨世代       | 戦後<br>第二世代 | 戦後<br>第三世代 | 合計                   |
|--------|-----------|-----------|------------|------------|----------------------|
| 作家数    | 17        | 9         | 15         | 14         | 55                   |
| 作家の生年  | 1894-1912 | 1900-1929 | 1932-1945  | 1940-1957  | 1894-1957            |
| 作品数    | 41        | 95        | 189        | 147        | 472                  |
| 作品の発表年 | 1926-1936 | 1945-1988 | 1960-1993  | 1968-1991  | 1926-1993            |
| 総文字数   | 323,024   | 1,000,632 | 2,483,454  | 2,035,890  | 5,843,000            |
| 異なり語数  | 145       | 261       | 176        | 33         | 551/615 <sup>9</sup> |
| 延べ語数   | 359       | 718       | 453        | 144        | 1,674                |
| 平均出現度数 | 2.48      | 2.75      | 2.57       | 4.36       | 3.04/2.72            |
| 異なり延べ比 | 0.40      | 0.36      | 0.39       | 0.23       | 0.33/0.37            |
| 出現率    | 11.11     | 7.17      | 1.82       | 0.70       | 2.86                 |

表 2 からいくつかのことが明らかになった。まず、調査対象となる四つの時期の中では、戦後第二世代にかかわる作品数や総文字数が最も多い。にもかかわらず、得られた異なり語数にせよ、延べ語数にせよ、跨世代においてはピークに達している。跨世代こそはまさに統治当局による日本語国語政策が相当な成果を収めた時期であり（例えばいわゆる「国語家庭」など）、この事実も日本語借用現象に忠実に反映されている。

次に、平均出現度数は「延べ語数÷異なり語数」を示すもので、数が大きければ大きいほど、同一用語が使われる頻度が高くなる、という意味である。表 2 によれば、日本統

<sup>9</sup> ここにいわゆる異なり語数の合計について、前者の 551 は、各時期の間で重複する用例の数も計算された可能性があると考えられるので、それを除外して計算した結果である。一方、後者の 615 は、単なる各時期の異なり例数を合計して得た値である。以下の「平均出現度数」と「異なり延べ比」との合計についても同様に、この二つの異なり語数を基準に計算された結果である。



治期から戦後第二世代にかけては大きな変化が見られないものの、戦後第三世代に至って、その率が急速に上がったことがわかる。当時の台湾社会では国語＝中国語が積極的に推進され、さらに日本語や日本文化の流入が主として政治上の理由から相当な制約を受けており、戦後第三世代の作家は日本語とはほぼ絶縁した状態に置かれていた。ゆえに、使用できる語彙の種類も限られ、そして、このような厳しい条件下に生き残った語彙もかなり広く知られ、かつは使用されたものと考えられる。

これに対し、異なり延べ比は、平均出現度数とは正反対に、異なり語数と延べ語数とを前後交換して割ったものなので、予想どおりに戦後第三世代は前三時期に比べてより低い値が得られた。これは語彙の多様性を示す大まかな指標となり<sup>10</sup>、数が大きければ大きいほど、その時期に現れた日本語借用現象の様態が多彩であることを意味している。当然のことながら、日本統治期の台湾作家は日本語教育の環境に恵まれているため、0.40 という高い数値でトップを占めている。なお、戦後第二世代の 0.39 という数値の高さもやや注目に値するが、これはこの時期で抽出された用例が数多く李喬の作品によるためだろう。<sup>11</sup>李喬の作品の文体については、3.2.2 節に譲りたいと思う。

最後の出現率とは、作品における 1 万字あたりの日本語借用の出現度数を指す。そこで、各期間の延べ語数を小説の文字数で割った「出現率」を使用するため、調査する文字数の多寡による影響が排除できよう。表 2 には、日本統治期に最大値に達しており、それから急速に減ってくる、ということがわかる。ここで注目したいのは、日本統治期と跨世代の数値はそれぞれ 11.11 と 7.17 であるが、戦後の第二世代と第三世代になると激減して 1.82 と 0.70 となった。つまり、戦前と戦後の台湾における国語政策の逆転により、跨世代と戦後第二世代の間にも大きな溝が開いたのだ、と言えよう。

### 3. 1 作家に見る日本語借用現象

#### 3. 1. 1 作家生年別の日本語借用現象

次に、作家の生年が日本語借用現象の使用にどのような相関性があるかを分析するため、作家の生年別を軸に得られた異なり語数、延べ語数、平均出現度数と出現率を表 3 にまとめた。年代については、1901-1910 年、1911-1920 年、のように 10 年を一年代として区切るが、データの都合上、1894-1900 年と 1951-1957 年の 7 年間を一年代とする。なお、日本統治期の作家である「廢人」（筆名）と張慶堂は生年不詳のため、統計からは除外した。

<sup>10</sup> 松本(1999:52)「ある中国人児童の来日 2 年目の語彙習得－『取り出し授業』での発話と作文の縦断調査－」を参照。

<sup>11</sup> 戦後第二世代で抽出された異なり語数は 176、延べ語数は 453 であるが、その中に李喬の作品から得られた「異なり語数」は 135 も、延べ語数は 283 もあり、この時期に採集された用例数の実に半分以上を占めている。



表 3：作家生年別の日本語借用現象

| 年代        | 文字数       | 異なり語数 | 延べ語数 | 平均出現度数 | 出現率   |
|-----------|-----------|-------|------|--------|-------|
| 1894-1900 | 239,670   | 170   | 321  | 1.89   | 13.39 |
| 1901-1910 | 214,607   | 119   | 187  | 1.57   | 8.71  |
| 1911-1920 | 57,406    | 36    | 68   | 1.89   | 11.85 |
| 1921-1930 | 764,006   | 216   | 479  | 2.22   | 6.27  |
| 1931-1940 | 1,750,891 | 199   | 406  | 2.04   | 2.32  |
| 1941-1950 | 1,704,291 | 25    | 68   | 2.72   | 0.40  |
| 1951-1957 | 1,064,162 | 46    | 123  | 2.67   | 1.16  |

表 2 と表 3 を比較すれば、その量的推移がおよそ一致していると言えよう。ただし、年代についての区切りが細かくなったため、表 3 のほうがより微妙的な平均出現度数と出現率の変遷が観察できよう。要するに、日本語借用の平均出現度数には激しい変化が見られないものの、年代が下るにつれて、ゆっくりと着実に増加していくことがわかる。これは同一の用語が多用されるようになり、また全体的にその用語が台湾での定着度も高くなったことを反映していよう。一方、出現率は 1901-1910 年から 1911-1920 年にかけて一度は上昇したものの<sup>12</sup>、全体的に減少傾向にある。特に、1894-1900 年に出現率が 13.39 であったのが、1951-1957 年に出現率が 1.16 となっており、わずか 60 年の間に実に 10 倍以上の差が出ている。

### 3. 1. 2 日本語借用の多い作家 10 人

本調査で取り上げた作家は 55 人であるが、ここでは、日本語借用の多い作家 10 人について見てみよう。

<sup>12</sup> 1911-1920 年に生まれた作家は、馬木樞ただ一人であり、また、調査した作品も今のところその〈西北雨〉一篇のみである。この時期に生まれた中国語主体の作家の人数もその作品数も、ともにデータとしてあまりにも少ないため、現段階ではまだ客観的な分析が行えない。この点、ぜひとも今後の課題としたい。

表 4：日本語借用の多い作家 10 人

| 順位 | 作家名 | 時期     | 生年   | 作品数 | 総文字数    | 異なり語数 | 延べ語数 | 出現率   |
|----|-----|--------|------|-----|---------|-------|------|-------|
| 1  | 蔡愁洞 | 日本統治期  | 1900 | 2   | 11,437  | 11    | 51   | 44.59 |
| 2  | 陳虚谷 | 日本統治期  | 1896 | 3   | 16,943  | 31    | 61   | 36.00 |
| 3  | 王詩琅 | 日本統治期  | 1908 | 3   | 24,974  | 62    | 87   | 34.84 |
| 4  | 陳千武 | 跨世代    | 1922 | 7   | 125,704 | 104   | 273  | 21.72 |
| 5  | 呂赫若 | 跨世代    | 1914 | 1   | 8,284   | 7     | 15   | 18.11 |
| 6  | 朱点人 | 日本統治期  | 1903 | 3   | 28,251  | 21    | 48   | 16.99 |
| 7  | 李 喬 | 戦後第二世代 | 1934 | 11  | 181,906 | 135   | 283  | 15.56 |
| 8  | 龍瑛宗 | 跨世代    | 1911 | 8   | 36,746  | 29    | 53   | 14.42 |
| 9  | 呉濁流 | 跨世代    | 1900 | 9   | 146,224 | 102   | 163  | 11.15 |
| 10 | 頼 和 | 日本統治期  | 1894 | 8   | 39,681  | 21    | 39   | 9.83  |

前節で作家生年別の出現率を観察したところ、日本統治期と跨世代の作家における出現率が高めの値で推移していたことがわかった。この結果に対応するかのごとく、日本語借用の多い作家 10 人には、日本統治期のほうから 5 人もランキングに入り、それに次いだのは跨世代の 4 人と戦後第二世代の 1 人である。なお、蔡愁洞は 44.59 という高い数値で 1 位を占め、10 位の頼和の 9.82 を大幅に超えた。要するに、戦前の作家たちは戦後の作家たちに比して、日本語借用の使用率がずっと高いものと結論づけられよう。

### 3. 2 作品に見る日本語借用現象

#### 3. 2. 1 作品発表年別の日本語借用現象

作家生年別に続いて、作品の発表年と日本語借用現象の使用との間にいったいどのような相関があるかについても探りたい。そこで調査の結果を表 5 にまとめた。表 3 と同様に 10 年を一年代として区切るが、データの都合上、1926-1930 年の 5 年間と 1991-1993 年の 3 年間を一年代とする。なお、調査した作品中、跨世代では、楊遼の〈泥娃娃〉、龍瑛宗の〈黒紐〉、〈青天白日旗〉、〈従汕頭来的男子〉、呉濁流の〈波茨坦科長〉、〈路迢迢〉と李篤恭の〈極短篇小説幾則〉、および戦後第三世代では、曾心儀の〈忠実者〉、〈閣樓裏的女人〉と鍾延豪の〈荒城〉、〈風箏再見〉、〈帰〉、〈山村〉、〈夜学者一日記〉は、いずれも発表年が不詳のため、統計からは除外した。

表 5：作品発表年別の日本語借用現象

| 年代        | 文字数       | 異なり語数 | 延べ語数 | 平均出現度数 | 出現率   |
|-----------|-----------|-------|------|--------|-------|
| 1926-1930 | 78,841    | 49    | 87   | 1.78   | 11.03 |
| 1931-1940 | 244,183   | 145   | 273  | 1.88   | 11.18 |
| 1941-1950 | 52,956    | 48    | 94   | 1.96   | 17.75 |
| 1951-1960 | 110,960   | 37    | 46   | 1.24   | 4.15  |
| 1961-1970 | 1,038,006 | 106   | 287  | 2.71   | 2.76  |
| 1971-1980 | 1,943,106 | 189   | 418  | 2.21   | 2.15  |
| 1981-1990 | 2,112,320 | 189   | 388  | 2.05   | 1.84  |
| 1991-1993 | 83,258    | 1     | 1    | 1      | 0.12  |

表 5 から、作品発表年別の平均出現度数は大きく見れば増加や減少といった通時的傾向は見出されず、安定して使用されていることがわかる。ただし、1961-1970 年に最大値の 2.71 が現れており、これは日本語借用現象の最も定着度が高い年代だと言えよう。

他方、日本語借用の出現率においては、1941-1950 年にピークに達し、それ以降は減少する一方である。特に 1941-1950 年（出現率＝17.75）と 1951-1960 年（出現率＝4.14）の間に急速に下がっている。その理由を考察するに、年代的には戦前と戦後の境目にあり、社会的背景としては、日本の敗戦により台湾は国民党政府に接收され、同時に日本語を排除し、北京語を主軸とする言語面での厳しい同化政策が展開されたことが挙げられよう。

1951-1960 年はほとんど跨世代作家によって発表される作品であり、これらの作家は元来は日本語で創作していたが、メディアにおける日文欄の強圧的な廃止<sup>13</sup>に伴って、戦後新たに「祖国の言葉＝中国語」を外国語として習得してから、再び中国語で執筆したのである。跨世代作家の作品に現れた日本語借用現象は、作家自身の中国語能力の不備や、自己にとって母語に準じていた日本語からの干渉によるもので、当然、日本統治期の中国語作家のそれとは背景を異にしている。その結果として、このような大きな差が現れたものと推測できよう。

### 3. 2. 2 日本語借用の多い作品 20 篇

さて、今回調査した 472 篇の小説の中でもとりわけ日本語借用の多い作品は何であろうか。とりあえず、トップ 20 位を表 6 にまとめてみよう。

<sup>13</sup> 政府主導によって推進された「中国化」運動の一環として、「台湾省行政長官公署宣伝委員会」からの指令により、1946 年 10 月 25 日から台湾全島ですべての定期刊行物における日本語版が廃止された。

表 6：日本語借用の多い作品 20 篇

| 順位 | 作品名     | 作家名 | 時期     | 発表年  | 文字数    | 異なり語数 | 延べ語数 | 出現率    |
|----|---------|-----|--------|------|--------|-------|------|--------|
| 1  | 皇民梅本一夫  | 李 喬 | 戦後第二世代 | 1979 | 13,262 | 105   | 232  | 174.94 |
| 2  | 保正伯     | 蔡愁洞 | 日本統治期  | 1931 | 3,377  | 7     | 47   | 139.18 |
| 3  | 燃焼的女人   | 龍瑛宗 | 跨世代    | 1946 | 1,824  | 7     | 12   | 65.79  |
| 4  | 放炮      | 陳虚谷 | 日本統治期  | 1930 | 4,928  | 14    | 29   | 58.85  |
| 5  | 一個同治的批信 | 頼 和 | 日本統治期  | 1935 | 3,480  | 6     | 16   | 45.98  |
| 6  | 先生媽     | 吳濁流 | 跨世代    | 1945 | 9,500  | 17    | 39   | 41.05  |
| 7  | 没落      | 王詩琅 | 日本統治期  | 1935 | 8,710  | 29    | 35   | 40.18  |
| 8  | 輸送船     | 陳千武 | 跨世代    | 1967 | 13,794 | 14    | 53   | 38.42  |
| 9  | 十字路     | 王詩琅 | 日本統治期  | 1936 | 11,368 | 24    | 42   | 36.95  |
| 10 | 蟬       | 朱点人 | 日本統治期  | 1935 | 7,843  | 12    | 25   | 31.88  |
| 11 | 他発財了    | 陳虚谷 | 日本統治期  | 1928 | 6,812  | 13    | 21   | 30.83  |
| 12 | 戦地新兵    | 陳千武 | 跨世代    | 1982 | 16,378 | 17    | 46   | 28.09  |
| 13 | 迷惘的季節   | 陳千武 | 跨世代    | 1982 | 26,334 | 25    | 73   | 27.72  |
| 14 | 不如意的過年  | 頼 和 | 日本統治期  | 1928 | 3,536  | 5     | 9    | 25.45  |
| 15 | 獄中記     | 葉石濤 | 跨世代    | 1966 | 25,802 | 8     | 59   | 22.87  |
| 16 | 勁風与野草   | 龍瑛宗 | 跨世代    | 1982 | 15,580 | 17    | 35   | 22.46  |
| 17 | 高潭村人物誌  | 鍾延豪 | 戦後第二世代 | 1980 | 14,516 | 9     | 32   | 22.04  |
| 18 | 旗語      | 陳千武 | 跨世代    | 1981 | 9,386  | 12    | 20   | 21.31  |
| 19 | 栄帰      | 陳虚谷 | 日本統治期  | 1930 | 5,203  | 4     | 11   | 21.14  |
| 20 | 夜雨      | 王詩琅 | 日本統治期  | 1935 | 4,896  | 9     | 10   | 20.42  |

前節の日本語借用の出現率についての討論では、台湾における「国語」が日本語から中国語へと切り替えられたのをきっかけとして、戦前と戦後とでは雲泥の差が見られることが明らかになった。このような高い出現率は、日本統治期と跨世代ばかりに集中している特徴に反映して、日本語借用の多い作品 20 篇の中に、日本統治期のほうが 10 篇もランキングに入り、それに次いだのは跨世代の 8 篇と戦後第二世代の 2 篇である。なお、日本統治期作家の陳虚谷と王詩琅、および跨世代作家の陳千武は、それぞれ 3 篇の作品もランキングに入った。実は表 4 と対照して見ればわかるように、この三人も「日本語借用の多い作家 10 人」においては、ちょうど 2, 3, 4 位を順に占めている。<sup>14</sup>

ここで注目すべきは、1 位の李喬が執筆した〈皇民梅本一夫〉である。この小説の会話

<sup>14</sup> なお、1 位の蔡愁洞については、収録されている中国語作品はわずか 2 篇しかない。このうち、表 6 でも取り上げた「保正伯」は、その題名が示すとおり、一人の村の顔役（保正）を主人公に、彼がその立場ゆえに統治者である日本人官吏（とりわけ教師や警察官）との間で経験するさまざまな軋轢が主題とされている。したがって、この作品が日本語借用において突出しているのには、内容から来る要素が小さくないということを忘れてはなるまい。

文では、大量の漢字を用いつつ、これに日本語の読みを当てている。つまり、漢字による日本語の音写である。それゆえ、日本語が理解できない読者にとっては、これらの語彙および句はおのずとほとんど無意味な漢字の羅列となり、その結果、すこぶる特殊な文体が呈現されている。拙稿(2011)「台湾における戦後第二世代の作家の小説に見る日本語借用現象」では、このような文体が李喬の小説にのみ認められる個人言語(personal language)などではなく、モダニズム文学そのものに淵源する文学的特徴を反映した言語表現である、ということを明らかにした。

#### 4. 使用語彙の性格

##### 4. 1 借形と借音の推移

本節では、日本語借用の形態という視点から、通時的傾向を考察してみよう。中国語における外来語の借用形態としては、広義には「借形語」、「借音語(音訳語)」と「意識語」の三種類が挙げられる。「借形語」は主に日本語から借用した漢字語を指し、「借音語」は原語の音声形式を漢字など<sup>15</sup>に変換した当て字であり、そして「意識語」は原語の意味を翻訳して新たな言葉で表したものである。漢字はもともと表意文字であり、なおかつ、中国語と日本語は同じ漢字文化圏に属しているがゆえに、日本語からの借用現象には基本的に「意識語」が現れず、「借形」と「借音」の二通りしか観察できない。

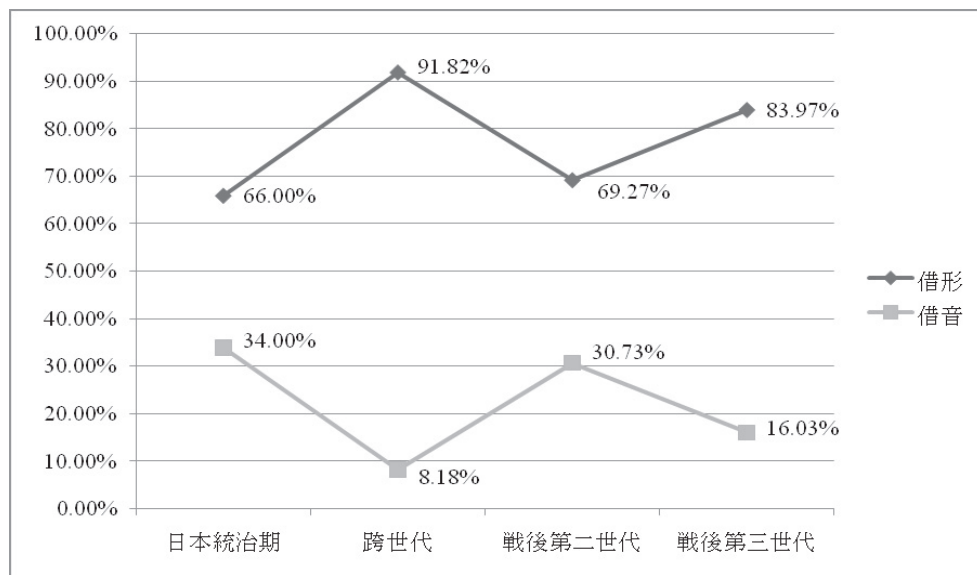


図2：各時期における借形と借音の推移図

<sup>15</sup> 借音語は、主に漢字で表記されるが、台湾ではかつて日本語教育が実行されたゆえ、日本語から借用する語の場合、カナや日本語の読み方をローマ字でつづるような表記方式も、しばしば見られる。

日中語彙交流史を見ればわかるように、一般に中国語における日本語からの借用には、漢字の借形語が最も大規模であり、これに対し、借音はまれである。とりわけ、借形語のピークが跨世代に現れるのは、作家自身が完全に中国語で創作する能力がまだ足りないもので、同じ漢字を用いる日本語から、意思疎通の手段として大々的に仮借を行ったためであろう。しかしながら、台湾の中国語における日本語の借用が中国本土のそれと様相を異にしている面として、それが本質的には日本の植民統治による「密切借用」<sup>16</sup>であるということ、ここで指摘しておかねばなるまい。元来がこの「密切借用」であったがゆえに、全体として日本統治期と跨世代にあっては、借形語のほうがなお多い。これが戦後第二世代と第三世代に至ると、借音語のほうが逆転し、量の上で借形語を大幅に超えている。要するに、戦後の中国語教育を受けた第二世代と第三世代の作家たちにあつては、日本語の読み書きはすでにできなくなっている、日本から借用した用語は、口語という形で依然戦後の台湾語や中国語の中にその痕跡をとどめていたのである。したがって、これら作家たちが日本語語彙を表現する際に、日本語における漢字表記がわからないまま、中国語による漢字の発音を借りつつ日本語を音写した例がすこぶる多い。これこそは彼らの作品に借音語が借形語より多く見い出される原因をなしたと言えよう。もちろん、このような借音語で使われた漢字は、作家による恣意的なものがほとんどを占めており、それだけに文字表記の上でもかなりのゆれが認められる。

#### 4. 2 意味分布

続いて、採集された日本語借用現象を、今度は意味分野の観点から分類してみよう。『分類語彙表一増補改訂版』（国立国語研究所 2004）の分類方式に従えば、名称を表す名詞の類（体の類）は 522 語、存在・活動を叙述する動詞の類（用の類）は 3 語、状態を叙述する形容詞・形容動詞・副詞・連体詞の類（相の類）は 38 語、そして、一部の副詞、接続詞、感動詞の類（その他の類）は 50 語、合計 613 語である。なお、『分類語彙表一増補改訂版』に収録されていない語や複数の意味項目に分けられている語があるため、この合計値は本調査において得られた異なり語数 551 と、必ずしも一致しているとは限らない。そして、「類」の下分類である「部門」による分類結果は、表 7 にまとめた。

---

<sup>16</sup> 史有為(2000:6)『漢語外来詞』では、借用の類型は「密切借用」と「文化借用」に分けられ、前者は強圧的な状況や雑居によるものであり、後者は文化の交流による、より自然なものである、という指摘を見る。同書の理論にしたがえば、日本統治期の台湾における日本語からの借用や、戦後の米軍による占領期における英語からの一連の日本語借用語彙（例：ギブ・ミー・チョコレート、GI、オンリーさん）こそはまさに、こうした「密切借用」の典型例である、と言えよう。

表 7：部門による意味分布

| 部 門                  | 日本<br>統治期 |       | 跨世代 |       | 戦後<br>第二世代 |       | 戦後<br>第三世代 |       | 全時期 |       |
|----------------------|-----------|-------|-----|-------|------------|-------|------------|-------|-----|-------|
|                      | 語数        | %     | 語数  | %     | 語数         | %     | 語数         | %     | 語数  | %     |
| 1.1 抽象的關係            | 16        | 10.53 | 34  | 15.25 | 37         | 18.05 | 6          | 18.18 | 93  | 15.17 |
| 1.2 人間活動の主体          | 31        | 20.39 | 42  | 18.83 | 37         | 18.05 | 13         | 39.39 | 123 | 20.07 |
| 1.3 人間活動—精神<br>および行為 | 50        | 32.89 | 76  | 34.08 | 36         | 17.56 | 7          | 21.21 | 169 | 27.57 |
| 1.4 生産物および用具         | 35        | 23.03 | 34  | 15.25 | 20         | 9.76  | 4          | 12.12 | 93  | 15.17 |
| 1.5 自然物および自然現象       | 5         | 3.29  | 24  | 10.76 | 15         | 7.32  | —          | —     | 44  | 7.18  |
| 2.1 抽象的關係            | —         | —     | —   | —     | 2          | 0.98  | —          | —     | 2   | 0.33  |
| 2.5 自然物および自然現象       | 1         | 0.66  | —   | —     | —          | —     | —          | —     | 1   | 0.16  |
| 3.1 抽象的關係            | 5         | 3.29  | 9   | 4.04  | 11         | 5.37  | 3          | 9.09  | 28  | 4.57  |
| 3.3 人間活動—精神<br>および行為 | 2         | 1.32  | 3   | 1.35  | 5          | 2.44  | —          | —     | 10  | 1.63  |
| 4.その他の類              | 7         | 4.61  | 1   | 0.45  | 42         | 20.49 | —          | —     | 50  | 8.16  |

時期によって順位の前後がやや変わるけれども、全体として、「1.3 人間活動—精神および行為」、「1.2 人間活動の主体」、「1.1 抽象的關係」、「1.4 生産物および用具」を表す語が多いことが、これらの調査からも明らかになった。また、各時期の意味分野には、とりたてて大きな特徴が見られない。つまり、戦前と戦後の台湾における国語が異なっていると言っても、日本語借用の意味分野には大きな影響を与えなかったものと見られよう。ただ、戦後第二世代では、「4.その他の類」が一位を占めており、これも 3.2.2 節で言及した李喬の作品による結果である。

さらに進んで「部門」の下分類である「分類項目」による分類を見てみると、全部 49 の分類項目の中で、「4.50 動物の鳴き声」以外、その他の 48 項目は全部見つけられる。このことから、台湾文学作品に置ける日本語借用現象の意味分野は非常に広範であったと結論付けられよう。「分類項目」による全時期としてのランキングは、多い順に「1.30 心」(7.83%)、「1.44 住居」(5.38%)、「1.33 生活」(4.40%)、「1.24 成員」(4.24%)と「1.15 作用」、「1.20 人間」、「1.35 交わり」(4.08%)などが挙げられる。なお、各時期の一位は、それぞれ日本統治期が「1.37 経済」、跨世代が「1.30 心」、戦後第二世代が「4.32 呼び掛け」、戦後第三世代が「1.20 人間」である。

#### 4. 3 高頻度語彙

ある語彙が作品における使用される状況は、深さと広さという二つの視点から観察できる。本節では、まず深さを表す高頻度語彙の特徴と通時的推移について述べる。この高頻度語彙についての判断は、語の出現度数によって決められる。

抽出された日本語借用現象の出現度数を、表 8 に示した。表での使用率とは、「該当語数 ÷ 全作品より抽出された語数」で計算された結果であるため、本調査においてそれぞれ異



なり語数と延べ語数の使用率が算出できる。この表からは、異なり語数 551 語のうち、1 回しか使われていない低頻度語彙は 328 語もあり、約全体の実に 60%を占めていることがわかる。また、出現度数 10 以上の 23 語（すなわち高頻度語彙）が累積延べ 652 語もあり、異なりの累積使用率は 4.17%に過ぎないが、延べの累積使用率は 38.95%を占めていることが読み取れる。

表 8：出現度数分布表

| 出現度数   | 語数  | 累積<br>異なり語数 | 異なりの<br>累積使用率 | 累積<br>延べ語数 | 延べの<br>累積使用率 |
|--------|-----|-------------|---------------|------------|--------------|
| 100 以上 | 1   | 1           | 0.18%         | 109        | 6.51%        |
| 99-50  | 2   | 3           | 0.54%         | 218        | 13.02%       |
| 49-40  | 3   | 6           | 1.09%         | 361        | 21.57%       |
| 39-30  | 0   | 6           | 1.09%         | 361        | 21.57%       |
| 29-20  | 6   | 12          | 2.18%         | 503        | 30.05%       |
| 19-10  | 11  | 23          | 4.17%         | 652        | 38.95%       |
| 9      | 6   | 29          | 5.26%         | 706        | 42.17%       |
| 8      | 2   | 31          | 5.63%         | 722        | 43.13%       |
| 7      | 7   | 38          | 6.90%         | 771        | 46.06%       |
| 6      | 13  | 51          | 9.26%         | 849        | 50.72%       |
| 5      | 17  | 68          | 12.34%        | 934        | 55.79%       |
| 4      | 30  | 98          | 17.79%        | 1,054      | 62.96%       |
| 3      | 42  | 140         | 25.41%        | 1,180      | 70.49%       |
| 2      | 83  | 223         | 40.47%        | 1,346      | 80.41%       |
| 1      | 328 | 551         | 100.00%       | 1,674      | 100.00%      |

次に、調査における高頻度語彙を表 9 に示そう。出現率の大きいものから小さいものに順に語を並べてつけた番号を、「順位」とする。この順位をつける場合に問題となるのは、出現率の等しい語が二つ以上ある場合の処置である。ここでは、国立国語研究所報告 12 の『現代語の語彙調査 総合雑誌の用語 前編』（1957）の基準にしたがって、「上位  $r$  語が決まり、その次に位する語が  $n$  個ある時、その  $n$  語に対しては、仮にそれらがすべて異なる使用率であったとした場合につく順位の平均、すなわち  $r + (n + 1)/2$  という順位を等しく与える」ものとする。

表 9：高頻度語彙

| 順位   | 見出し                          | 日本<br>統治期 | 跨世代 | 戦後<br>第二世代 | 戦後<br>第三世代 | 全   |
|------|------------------------------|-----------|-----|------------|------------|-----|
| 1    | ～サン/～桑                       | 34        | 18  | 45         | 12         | 109 |
| 2    | 密林                           | -         | 59  | -          | -          | 59  |
| 3    | 検事                           | -         | 50  | -          | -          | 50  |
| 4    | 奥巴桑/欧巴桑/阿巴桑[おばさん]            | -         | 1   | 36         | 12         | 49  |
| 5    | 輸送船                          | -         | 45  | 3          | -          | 48  |
| 6    | 榻榻米[たたみ]                     | -         | 8   | 25         | 13         | 46  |
| 7    | 馬鹿/莫迦/巴格/バカ                  | 5         | 9   | 1          | 12         | 27  |
| 8.5  | 奥サン/奥桑/欧桑[おくさん]              | 24        | -   | 1          | 1          | 26  |
|      | 会社                           | 14        | 5   | 7          | -          | 26  |
| 10   | 現地                           | -         | 23  | -          | -          | 23  |
| 11.5 | 自動車/自働車                      | 20        | -   | -          | -          | 20  |
|      | カ/嘎/喋                        | 1         | -   | 4          | 15         | 20  |
| 14   | 祈念                           | -         | 18  | -          | -          | 18  |
|      | 皇民                           | -         | -   | 18         | -          | 18  |
|      | ハイ/嗨/哈伊                      | 1         | 1   | 11         | 5          | 18  |
| 16   | 内匠[ねえちゃん]                    | -         | -   | -          | 14         | 14  |
| 18   | 給仕                           | 13        | -   | -          | -          | 13  |
|      | 寄附                           | 13        | -   | -          | -          | 13  |
|      | 女中                           | -         | -   | 3          | 10         | 13  |
| 20   | 馬鹿野郎/莫迦野郎/巴格野魯/<br>八個野鹿/巴格耶魯 | -         | 3   | 1          | 8          | 12  |
| 22   | 日本語                          | -         | 10  | -          | -          | 10  |
|      | 上陸                           | -         | 10  | -          | -          | 10  |
|      | カーチャン/卡将                     | 1         | -   | 9          | -          | 10  |

「～サン/～桑」は出現率が 109 で、台湾文学作品における最頻出語彙と言ってよい。その他に、4 位の「奥巴桑/欧巴桑/阿巴桑」、8.5 位の「奥サン/奥桑/欧桑」、16 位の「内匠」、22 位の「カーチャン/卡将」なども呼称を表す用語である。これは小説の地の文や会話文で、呼称が普通の名詞とは異なり、何回も繰り返して使われることが多いのと、日常生活で最も親しまれている語彙であったためと考えられる。実は、田中(1973:143)では、すでに次のような指摘がなされている——「一般の文章、特に小説などにおいては、キー・ワード密度の高い文が、対話部分に偏在しやすいことである。小説類の場合、キー・ワードとして重要な役割を果たすものは、主人公やヒロインの名前であるが、キー・ワードが、この種のものであると、キー・ワード密度が最も高くなりやすいのは『誰々さん!』といったような、単なる呼びかけのセンテンスということになってしまう」と。筆者もまたこの見

解に全面的に同意したい。いまこの調査結果を見ても、これらの呼称が高頻度語彙になりやすい事実が改めて認識される。

なお、この表を横向きに見てゆくと、これら四つの時期を通じ、そのすべてに現れた、いわば長寿用語は「～サン/～桑」、「馬鹿/莫迦/巴格/バカ」、「ハイ/嗨/哈伊」の 3 語である、ということが知られよう。そして、同じ表を今度は縦向きに見てゆくと、各時期の最頻出語彙は、日本統治期では「～サン/～桑」、跨世代では「密林」、戦後第二世代では「～サン/～桑」、そして戦後第三世代では「カ/嘎/喋」である、ということが知られよう。

#### 4. 4 広範囲語彙

語彙が使用される広さを確かめるべく、表 10 の広範囲語彙表をまとめた。高頻度語彙は語の出現度数によって決められるのとは違い、広範囲語彙とは、異なる作品にわたって多く出現する語彙なので、小説の篇数によって決まるのである。要するに、これは同じ作品において現れる回数にかかわらず、一概に出現回数 1 度として計算したものである。ここでは、日本語借用現象の中でも小説数 5 篇にまでわたって広範囲に出現した事例のみを算出することとした。

表 10：広範囲語彙表

| 順位  | 見出し                      | 小説数 | 作家数 | 日本統治期 | 跨世代 | 戦後第二世代 | 戦後第三世代 |
|-----|--------------------------|-----|-----|-------|-----|--------|--------|
| 1   | 榻榻米[たたみ]                 | 28  | 18  | -     | 6   | 11     | 11     |
| 2   | 馬鹿/莫迦/巴格/バカ              | 13  | 9   | 4     | 5   | 1      | 3      |
| 3.5 | 会社                       | 12  | 10  | 7     | 2   | 3      | -      |
|     | ～サン/桑                    | 12  | 9   | 3     | 3   | 3      | 3      |
| 5   | 自動車/自動車                  | 9   | 6   | 9     | -   | -      | -      |
| 7   | 奥巴桑/欧巴桑/阿巴桑[おばさん]        | 7   | 7   | -     | 1   | 2      | 4      |
|     | 馬鹿野郎/莫迦野郎/巴格野郎/八個野郎/巴格野郎 | 7   | 6   | -     | 2   | 1      | 4      |
|     | 祈念                       | 7   | 1   | -     | 7   | -      | -      |
| 9.5 | 奥サン/奥桑/欧桑[おくさん]          | 6   | 5   | 4     | -   | 1      | 1      |
|     | ハイ/嗨/哈伊                  | 6   | 5   | 1     | 1   | 2      | 2      |
| 13  | 退院                       | 5   | 5   | 3     | -   | 2      | -      |
|     | 日本語                      | 5   | 3   | -     | 5   | -      | -      |
|     | 輸送船                      | 5   | 2   | -     | 4   | 1      | -      |
|     | 密林                       | 5   | 1   | -     | 5   | -      | -      |
|     | 現地                       | 5   | 1   | -     | 5   | -      | -      |

高頻度語彙の 1 位は「～サン/～桑」であるのに対し、広範囲語彙の 1 位は「榻榻米」である。「榻榻米」は跨世代に初めて現われた言葉だが、それ以後各時期において安定し

て 28 篇もの小説に登場し、そして、18 人の作家にも使用された。

広範囲とは言え、4.3 節で論じたような四つの時期に共通して出現した語彙もあれば、逆に一時期にのみ現われるばかりであっても、同時期の多くの作品に現れているものもある。日本統治期の場合は「自動車/自働車」が、跨世代の場合は「祈念」、「日本語」、「密林」、「現地」が挙げられる。これらの用語は中国語教育の実行により、中国語語彙に取って代わられたり、あるいは全くの廃語と化したりしたが、かつて短期間で頻繁に使用されたからこそ<sup>17</sup>、この時期の典型例となったものと考えられよう。

最後に、上記広範囲語彙表での 15 語は、「退院」を除けば、すべて高頻度語彙表にも出現している。それゆえ、これら 14 語を台湾文学作品において高頻度で、しかも広範囲に使用される「最重要な日本語借用現象」<sup>18</sup>と言っても差し支えなからう。

## 5. おわりに

本稿では、台湾文学作品に見る日本語借用現象についての通時的調査により、各時期および全時期の量的推移と借用の特徴などをほぼ明らかにした。台湾では、戦前の国語は日本語、そして、戦後になってから瞬く間に中国語へと強制的に改められた。そのため、文学作品における日本語借用現象の平均的な出現度数、出現率や借用の形態も、終戦時を境界としておおよその分割線を引くことができ、戦前と戦後とで異なる容貌が示されている。戦前の日本語借用現象にあつては、より低い平均出現度数、より高い出現率、そして、借形語が借音語より多い、ということが観察される。また、日本語借用の多い作家と作品も、日本統治期と跨世代に集中している。

次に、抽出された日本語借用現象の出現度数が 1 である低頻度語彙は、全体の約 60% を占めている。その一方で、出現度数 10 以上の高頻度語彙が 23 あり、5 篇以上の小説に出現した広範囲語彙が 15 あり、この両者に重ねて現われた高頻度・広範囲の 14 語を、台湾文学作品に見る「最重要な日本語借用現象」と見なすことができよう。

今後の課題としては、今回取り上げた小説作品をさらに仔細に読み込み、ストーリーがその作品の日本語借用現象に与えた特殊な要素がないかどうか逐一確認してゆきたい。

## 文献

影浦峽 (2001) 延べ語数と異なり語数—量的尺度としての問題—, 『日本語学』四月臨時増刊号, 99-107

黄意雯 (2009) 『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 別巻』に見る日本語の借用現象, 『東吳日語教育學報』第 33 期, 55-81

黄意雯 (2010) 台湾における跨世代作家の中国語作品に見る日本語借用現象, 『台湾日本語文学報』第 27 期, 台湾日本語文学会, 293-317

<sup>17</sup> 「祈念」とは恐らく、第二次世界大戦中の地域社会（台湾をも含む）における「皇軍必勝祈念」を、「密林」とは多くの台湾人男性が日本軍の軍属として狩り出され帰らぬ人となった南方地域のジャングルを指していよう。

<sup>18</sup> 橋本(2010:169)『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』では、「社説の最重要外来語」という用語が見られる。

- 黄意雯（2011）台湾における戦後第二世代の作家の小説に見る日本語借用現象、『天理台湾学報』第20号，天理台湾学会，95-114
- 国立国語研究所（1957）『現代語の語彙調査 総合雑誌の用語 前編』，東京：秀英出版
- 施恒雅（2009）現代台湾における日本語からの借用語の使用状況，『言語と言語教育をめぐって』第3巻，2009年度立命館大学大学院言語教育情報研究科院生論文集，455-473
- 鍾季儒（2005）雑誌『日本文摘』と『台北ウォーカー』からみた台湾の中国語における新外来語－日系外来語を中心に，『比較語彙研究の試み13』，語彙研究会
- 沈国威（2008）『近代日中語彙交流史 新漢語の生成と受容』，東京：笠間書院
- 田中章夫（1973）自動抄録処理におけるキー・ワードの性格，『電子計算機による国語研究V』，141-184，東京：秀英出版
- 杜岱玲（2009）台湾に入った日本語語彙の特徴，『大葉応用日語学報』第3号，143-165
- 中川仁（2009）『戦後台湾の言語政策 北京語同化政策と多言語主義』，東京：東方書店
- 橋本和佳（2010）『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』，東京：ひつじ書房
- 松永正義著（2008）『台湾を考えるむずかしさ』，東京：研文出版
- 松本恭子（1999）ある中国人児童の来日2年目の語彙習得－『取り出し授業』での発話と作文の縦断調査（形態素レベルの分析）－，『第二言語としての日本語の習得研究』第3号，36-55
- 山田雄一郎（2005）『外来語の社会学－隠語化するコミュニケーション－』，横浜：春風社
- 若林正丈（2005）台湾の近現代と二つの「国語」，『漢字圏の近代 ことばと国家』，17-34，東京：東京大学出版会
- 史有為（2000）『漢語外来詞』，北京：商務印書館出版
- 朱双一（2002）『戦後台湾新世代文学論』，台北：揚智文化
- 余昭玟（2002）『戦後跨語一代小説家及其作品研究』，台南：成功大学中国文学系博士論文
- 松永正義（2003）台湾的日語文学及台語文学，『中外文学』第31巻 第10期，11-28
- 曹逢甫（2000）台式日語與台湾国語－百年来在台湾發生的兩個語言接触实例，『漢学研究』第18巻特刊，273-297

**付記** 本稿は2011年11月19日に「2011年応用日語教学国際学術研討会」（会場：台湾呉鳳科技大学）において発表した初稿へ，さらに加筆訂正を加えたものである。

（2012年1月4日受付）

\*\*\* Keywords and Abstracts\*\*\*

***Report***

**Variation of the Phenomenon of Japanese Loanwords in Taiwanese Literatures**

HUANG Yi Wen (Wenzao Ursuline College of Languages)

Keywords: phenomenon of Japanese loanwords, average occurrence times, occurrence rate, high-occurrence words, widely-used words

**Abstract:**

This study is aimed at investigating the phenomenon of Japanese loanwords in Taiwanese literatures which are caused by language contract after Japanese occupation. The time duration of the novels surveyed in this study is from Japanese occupation to 1980 after war. This time duration is divided into four periods: Japanese occupation, cross-generation, second generation after war, and third generation after war.

The result of this study shows that since the national language in Taiwan is Japanese before war while it is Chinese after war, the average occurrence times, concurrence rate and type of Japanese loanwords happened before war is different to that occurred after war. In addition, “the most important phenomenon of Japanese loanwords” is concluded in this study after mining high-occurrence words, widely-used words hidden in Taiwanese literatures.